

日本における礼拝のインカルチュレーション

中 道 基 夫

宣教学の中でキリスト教とその宣教地における文化との関係は、積極的な評価としては、土着化、アコモデーション、適応化、文脈化などという言葉で表現され、否定的な評価としてはシンクレティズムとして議論されてきた。

しかしながら、特に第二次大戦後、欧米中心主義的キリスト教宣教理論が批判され、むしろ各文化の中での独自のキリスト教のあり方、またキリスト教以外の宗教を評価し、対話していこうとする中で、従来の宣教理論そのものが見直されてきた。その中で、文化人類学のエンカルチュレーション (Enculturation) という概念を応用し、宣教学で新たにキリスト教と諸文化との出会いと受容の問題を新たに定義づけ、積極的に評価しようとするのが、インカルチュレーション (Inculturation) である。

インカルチュレーションは、キリスト教の教義の一つであるインカネーション(受肉) という概念と結びつき理解されてきた。キリスト教の福音が一つの文化と出会うことによって、その文化の中で具体的な姿として受肉することこそ、福音が本来持っているダイナミズムであると考えられている。インカルチュレーションは不断の運動を繰り返すものであり、文化は福音の表現に影響を与えると共に、福音はその文化に変革をもたらすものである。

世界の宣教学の研究においても、それぞれの国でのインカルチュレーションの事例研究が進められている。

日本にプロテスタントのキリスト教が伝わって150年が過ぎた。150年前に、キリスト教が欧米から全世界に広まっていく中で、欧米のキリスト教文化や礼

拝様式、教会建築が伝えられ、それを忠実に真似ることが非常に大切なこととして尊重されてきた。

そのおかげで日本のキリスト教はある一定の水準にまで成長したが、現代はキリスト教を欧米文化の中に閉じ込めてしまい、そこにキリスト教の純粋性を見るのではなく、日本の文化と結びついた独自のキリスト教文化の開花（インカルチュレーション）を積極的に評価しようとしている。それはキリスト教と諸文化を容易に結合させ、新たな表現を意図的に生み出そうとするのではなく、宣教のプロセスの中で生まれてきた福音のダイナミックな働きの発見である。

本研究プロジェクトは、その緒についた段階ですがあるが、これまでキリスト教の中で当然と思われてきた言葉や習慣、音楽に注目し、その宣教論的な意味を神学、社会学、言語学のアプローチによって解明しようとしている。

研究会の中で、中道基夫（神学部教授）は、日本語の「主の祈り」の翻訳元となったと思われる英語の“Lord’s Prayer”の“thy name”という言葉が、日本語では「御名」と訳されているところに注目した。“thy name”は直訳するならば「あなたの名」「爾の名」となる。しかし、1888年の訳では「御名」とすることで、祈りの対象である神に対して「あなた」「爾」と呼びかける直接的な関係性が、少し距離感のある関係性へと変化している。

英語の“Lord’s Prayer”こそキリスト教の本質を示しており、日本語の「主の祈り」はその本質を損なっているということも言える。また「御名」と訳し、毎週そのように唱えることによって日本独特の神理解をもたらししていることが想像される。

山泰幸（人間福祉学部教授）は、「弔辞例文に見る死者の語られ方」と題して、キリスト教の用語である死者の居場所としての「天国」がいつ頃から弔辞例文に登場するか、またその中で使われている「天国」がどのような意味を持っているかについての研究をすすめた。神とか、天国であるとか、宗教的な事象の存在を証明することは難しいものである。しかし、そのような「天国」というものが、ことばで表現されるときに、そのことばを共有する社会で存在するものとなる。その際に、それが一体どういうものであるという指摘は大きな示唆

を与えてくれるものであった。そのことばの内容は、そのことばが属する文化から影響を受けることが伺える。

桐藤薫（神学部・文学部非常勤講師）は「神概念のインカルチュレーション — 漢訳聖書翻訳史の視点から—」と題して、宣教師たちがキリスト教の神概念を漢語圏に伝えようとしたのかについての研究がなされた。宗教的概念が他の文化の中に入ってきた時に、「翻訳」はインカルチュレーションの初期的・基本的なプロセスである。その後のキリスト教概念の受容に大きな影響を与える重要なプロセスでもある。英語のGodという言葉が、漢語圏で漢訳として採用された「天主」「上帝」「神」をサンプルとして取り上げ、それぞれキリスト教の神概念の受容にそれぞれ違う影響を与えたことが示された。

「日本語賛美歌のことば～チャールズ・ウェスレー作詞賛美歌の翻訳と受容」というテーマの研究を紹介した水野隆一（神学部教授）は、ウェスレーの賛美歌が日本でどのように訳され、またどのような曲と組み合わせられて歌われてきたかをたどり、日本におけるウェスレー神学の受容と変容の問題に迫った。また、数あるウェスレーの賛美歌の中からどのような曲から、どのような曲が選ばれ、そしてどれがどのように訳されてきたかという分析は、ウェスレーの神学の受容の問題であると共に、日本におけるキリスト教の受容に通じるものであった。そこには、日本の教会の中で、キリスト教教義を個人的な信仰の確信や情緒の問題として取り上げてきた特徴が伺えるものであった。

残念ながら、時間的な問題から、いずれの研究も一つの結論にいたるものではなかったが、今後このような研究が進むことによって、インカルチュレーションが単純に積極的に評価されるだけでなく、批判的に評価されることもキリスト教研究の課題として意識されることになるであろう。しかし、そのような自由な研究を通して、日本におけるキリスト教のインカルチュレーションが推進されていくことが期待される。